

永井路子

雲と風と



云と風と

永井路子



中央公論社

定価 1100 円

雲と風と

昭和六十二年五月二十五日初版発行
昭和六十二年八月 十 日再版発行

著 者 永井路子

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二一三四

©一九八七

ISBN4-12-001581-5

雲と風と
目次

黒子のある少年 7

鷹を据える青年 47

比叡への道 75

平安京への道 97

雲嶺の梵音 139

朕、利あらざるか 171

王者すでに亡し
214

久隔帖
249

東国に塔は建つ
280

わがために仏を作ることなかれ
303

付
記
339

雲
と
風
と

黒子ほくろのある少年

「沙弥しゃみ最澄 年十八

近江国滋賀郡古市郷戸主正八位下三津首淨足戸口ひろの広野

黒子ほくろが頸の左側と、左肘を折り上げた上にある」

何という素朴な、飾りけのなさであろう。たった二つの、それも芥子粒ほどのほくろだけを生きるあかしとして、彼、最澄は登場する。歴史に素肌をさらすようなこの出発を手がかりに、その生涯を追いつけてみたい。

さしずめ、高僧伝にありがちな誕生の奇瑞譚は横においておく。ある時代にはそれが不可欠な礼儀でもあり常識であったとしても、いまは素肌だけをみつめてゆく。

さて、素肌に刻されたほくろである。彼が天皇や高級貴族の出身だったら、こういう記録のされ方はしなかったろう。貴人に対しては背が高いとか容貌がすぐれていたというような漠然たる賛辞以上に、立ち入って肉体的特徴を記さないことが礼儀であったようだし、天智天皇、藤原鎌足、聖武天皇などの生存時の肖像は皆無である（有名な聖徳太子像も、学者から疑問が提出されてい

る。

ところが、反対に、庶民や奴隸は、計帳けいちょうと呼ばれる課税台帳に、はっきりとその肉体的特徴——例えば傷跡がどこにあるというように——が書きこまれている。中でもほくろは重要な手かりで、現在の血液型や指紋に相当する。奴隸の場合は逃亡したとき搜索のきめてにもなる。

最澄がこうした肉体的特徴を明記されて歴史に登場するということは、おのずと彼の出自を物語っている。戸主の三津首浄足もどういう人物かわからないのだが、正八位下という位を持っているところを見ると、琵琶湖の西南海岸を本拠とする在地有力者だったと思われる。ただし、広野との血縁関係はわからない。ふつうは、広野の父が百枝ももえだ、その父が浄足と理解されているが、そのころの戸籍は大家族制をとっており、必ずしも直系家族だけが書きこまれているとは限らず、血のつながりが薄くとも戸主と戸口という形で書きこまれているものも多い。また戸主と戸口が同じ場所に住んでいたとはいえず、ここから生活の実態を復元することは不可能というのが、最近の学界の考え方である。

結婚のあり方も今とは違う。多くの場合は妻つま訪い婚で夫が妻の方に通い、生れた子は妻の家で育つ。となれば興味のあるのは広野の母方だが、これについては贈太政大臣藤原魚名うおなの子の鶯取わとりの娘、藤子だという伝承がある。藤子の名は『尊卑分脈』にも鶯取の娘として載っているのだが、さてどうだろうか。

『尊卑分脈』というのは、源氏、藤原氏その他の主要な諸氏の系図を集大成したもののだが、そこに鶯取について没年を弘仁八年、四十五歳としているかと思うと、息子の藤嗣にも、同じく弘仁八年四十五歳没としている杜撰ずさんさなのだ。なお困るのは、この没年から逆算すると、生れたのは

七七三年。七六〇年代生れの最澄より年下になってしまふ。『尊卑分脈』は系図としては最も信用のおけるものということになってはいるが、室町時代に作られたものだから、ときどきこういう誤りがある。

では、もつと信用のおけるものはないだろうか。頼りにすべきは『続日本紀』だが、そこにはたしかに鶯取が登場し、広野の生れた数年後にはすでに官界で活躍しているから、『尊卑分脈』の年齢の記載は、あきらかに誤りである。

もつとも『続日本紀』からは鶯取の生没年代はたしかめられないのだが、彼の父親の魚名の生きていたのは七二二年から八三年までだから、鶯取の生れたのは、どう考えても七四〇年代くらいに想定しなければならない。とすれば、藤子が生れたのは七六〇年代くらいで、これでは広野の母となることは不可能である。やはり藤子母親説は見送っておいたほうがよさそうだ。

それに鶯取の父の魚名は左大臣という最高権力の座まで上った人物である。その死の前年、ある事件に関係してその地位を失つてはいるが、まずトップクラスの高官だ（太政大臣が贈られるのは死後のことである）。鶯取は父の死に先立つて死んだらしいのだが——というのは他の息子たちは父の失脚のとき、ほんの一時期左遷されているのに、その中に彼の名が見えないので——早死したとしても中務大輔まで昇進したことがたしかめられる。こうした中央の頭官の娘が、正八位下にすぎない三津首浄足の戸口の百枝と結婚することはまず考えられないし、別の史料では鶯取の娘の一人、小屎は、桓武天皇の後宮に入っているくらいである。藤子母親説はもしかすると、後に君臣の垣を超えて魂の交わりを持つにいたった桓武と最澄の間柄から生れた伝承ではないだろうか。むしろ、ここでは、従来の説に別れをつけて、改めて広野にふさわしい母親を探した方

がいい。じつは、彼の実母のゆかりの地と伝えられるところが、比叡山の麓には残っているのである。

大津市坂本の生源寺。

ここで彼は生れたという。坂本はすでに大友郷だが、古市郷とは隣接している。族内結婚の多かったそのころの事情を考えれば、父と母は同族か、あるいは同程度の有力な家で、いずれも琵琶湖に程近い平地を本拠としたとすれば、父は湖上を小舟を操って渡ってきたのか、それとも、湖沿いに馬を飛ばせて娘に逢いにきたのか。三津というのは、坂本の東南の戸津、志津、今津の三つの津の総称であるともいい、現実に父の住居の跡を比定するのは困難だが、三津首は海沿いの陸地や湖の交通も掌握していたのではないか。そのせいか、私は、夕映えの残る湖面を渡って恋人を訪れる若い男を何となく想像してしまうのであるが。

現在、生源寺から歩いても近いところに広野の父の旧宅跡がある。紅染寺跡こうぞうじという美しい名前と呼ばれるその地は、今は殺風景な小丘陵にすぎない。周囲は開発が進んで宅地化しているのに、そこだけ忘れられたように丈の低い柿の群落があり、小さな畠も残っている。畔道と呼びたい小径を上ってゆくと、ぽつんと「南無阿弥陀仏」と彫られた丈高い碑が建つ。広野の母の家も、かなり有力な豪族だとすれば、その父は、娘が百枝と結ばれ、広野を産んだ後、夫を迎えるための家を造ったという想像も許されるだろう。

ここで「広野を産んだ後」と簡単に書いたのには多少の意図がある。最澄の伝記である『叡山大師伝』では、両親は子供のないのを憂え、叡山に登山して霊地を発見し、ここで七日間の祈願を志したが、四日めに早くも霊夢を見、やがて広野が誕生したということになっているのだが、

こうした奇瑞譚には、あまりかわらずにおきたいのだ。

第一、両親が子なきを憂えるというのは、もう少し後になってからの発想だ。妻訪い婚である以上、一人の男と一人の女の結びつきは永久絶対なものではなく、子供がなければ別の女の許に通えばいいのである。また必ずしも直系相続の原理は確立していないから、何としても子供が欲しいと思ったかどうか、これも断定しがたい。

歴史ものを書くときのくせで、こういうとき、なぜこうした伝説が起ったかを考えてしまうのだが、思うに、最澄と叡山との結びつきが、この世ならぬものであり、誕生以前からの因縁であると同調したかったのではないか。とすれば、千二百年後の今は、こうした伝承から解放されて、はっと一息つくことも許されていいはずだ。当の私はいえは、史料の上を虫が這うようにして行きたい方なので、ここでは、山麓に住む有力豪族である母方と叡山とのかかわりに注目するにとどめたいのである。

藤原藤子という「母」を否定してしまいたいま、彼女は眼も鼻も、名前さえもわからない存在になってしまっているけれど、耳を澄ませばその声は聞えないだろうか。

「いけませんよ、広野、おいたをしては」
「あら、着物をこんなに濡らして。また湖にいったのね」

広野は聡明な少年だったらしいが、幼いときは家からごく近い琵琶湖の岸辺で魚を追いかけてり、水遊びもしたであろう。彼の生涯には、がっかりするほど女の気配はないのだが、浜辺の戯れの中に女の子がいなかったとは思えない。あるいは母の姉妹の娘たち、母にかしづく女たち、

女童
——

ときには比叡山の山裾から緑の濃い峰へと攀⁴じ登ったこともあるだろう。高みに上れば、湖までの野原には四季の花が咲いては散ってゆくのが見えたはずだ。少年の眼には、比叡山の緑のあまりの深さが恐しくはなかったか。けたたましい鳥の声にふと足をとめれば、過ぎ去っていった時雨のいたずらか、白い雲は、かすかに昼虹の光彩を映していることもあったろう。

「ふしぎだなあ、あの雲の色」

少年と少女は見とれたかもしれない。

あるいは夕陽が比叡の山に隠れるころ、湖畔に立って湖面の乱反射をみつめるシルエットを思いついてもいい。当時の少年、少女は早熟だ。十二、三で性の愉しみを知ったとしても不思議ではない。広野の傍に黙って空をふり仰ぐ睫の長い近江乙女を想像することも可能なわけだが、しかし、恣意な空想は打ち切らねばならない。

少年の旅立つ日がきたのである。

広野十二歳、国分寺入りをする事になったのだ。

「広野さまが国分寺に行かれる！」

そのとき、父方にいたにしろ、母方にいたにしろ、話題は人々の耳目を驚かしたことだろう。

「——そうだろうな、ずば抜けて頭のいい坊ちゃんだから」

うなづく人々も多かったかもしれないが、

「それにしても——」

感に堪えず、言葉を失う者もいたのではないか。彼の秀才ぶりを、『叡山大師伝』は、

「年七歳ニシテ学同列ヲ超エ」（原文は漢文）

と書いている。学んだのは「陰陽、医方、工巧」だったとも。

ちょっと但書をつけておくと、最澄の生れた年について、七六六年説と六七七年説があつて、大論争があり、それぞれ興味ある説を展開しているのだが、専門にわたるのでここでは触れない。

それより関心のあるのは、なぜ広野は秀才だったのかということだ。生れつきの頭のよさもあるうが、環境も影響しているだろう。その理由の一つに、渡来系の出自をあげる人がいる。たしかに、三津首は中国の後漢の孝献帝の苗裔で、応神朝に日本に渡来したという伝承を持っているのだが、広野の生れたころとは五百年の隔りがあり、現在、十五世紀（室町時代）の先祖の話を持ちだすようなもので、肉体的血筋はとくに日本人化してはいたはずだ。

しかし、先進文化を身につけて渡来してきた彼らには、その伝統が流れており、三津首と同族と思われる近江系の人々の名前が、奈良時代の中央や地方官司の下級官人の中に多く見出されるという。これについては蘭田香融氏の詳細な研究（『日本思想大系・最澄』岩波書店）がある。三津首浄足は古市郷の農民層だとしても、文化的な土壌はあつたはずだし、農業の技術は、土着の人より格段にすぐれたものを持っていたらうから、長い歳月が、かなりの富の蓄積をもたらしていたと思われる。むしろこの豊かさの方を、少年広野の両親の背後に私は考えておきたい。

しかも、近江の人々は、広野の生れる前の百年ほどの間に、二度も大きな政治的、文化的な衝撃を体験している。

最初は六六七年の近江遷都。天智天皇と藤原鎌足の構想によって定められた大津京は、広野の父の本拠、三津のごく近くだった。

「われらの国に都が造られる！」

近江の人々は眼をみはる思いで新都建設を見守ったことだろう。しかしこの大津京はひどく短命だった。壬申（じんしん）の乱で壊滅し、結局都だったのは五年ほどである。

「大宮はこと聞けども、大殿はこと言へども」

と詠んだのは柿本人麻呂だが、身近にその盛衰を眼にした近江びとの衝撃は、より大きかったのではないか。

それとは別な意味で近江への執念を燃やし続けたのは藤原氏である。彼らは先祖鎌足のこのときの構想を忘れようとはせず、ほとんど執念ともいえるべき情熱と野心をこめて近江回帰を画策しつづけた。鎌足の息子、不比等が、死後（たしか）淡海公と諡されたのはその悲願達成の一つで、淡海はすなわち近江である。その子武智麻呂は近江守としてこの地を訪れたし、その後も藤原一族は長く近江守の地位を握り続けている。

中でも武智麻呂の子、仲麻呂の近江への執着はすさまじい。彼は光明皇后、孝謙女帝の腹心として辣腕を振ったマキアベリストだが、孝謙の後を継いだ淳仁時代、遂に近江に第二の宮都を作ること成功した。石山寺の近くの保良宮（ほら）がそれである。

「遂に先祖の夢を再現したぞ！」

と仲麻呂はほくそ笑んだに違いない。ときに、七五九年、保良宮に続いて、石山寺の大きかりな造営も進められたが、しかしこの大事業は、またもやあっけなく崩壊する。仲麻呂と孝謙の仲が陰悪になり、孝謙がにわかに奈良に引き揚げてしまったのだ。その後間もなく両者は武力対決し、仲麻呂は近江に逃れて敗死する。

「おお、またしても……」